だんじり会館のあり方等検討委員会　議事概要

審議会名	第3回だんじり会館のあり方等検討委員会
日時	2024（令和6）年12月23日（月）13:30~15:30
会場	伊賀市役所本庁舎　会議室201
出席者	【委員】 小林慶太郎委員長　福田良彦副委員長　後藤渡委員　菊野善久委員 重藤邦子委員　山口真由子委員 【伊賀市/事務局】 産業振興部長　堀川敬二　産業振興部次長　福山朋宏 観光戦略課長　山田靖子　同課主幹兼誘客推進係長　辻本康文 同課主幹兼事業係長　川合理恵 【伊賀市/関係部署】 企画振興部文化振興課　岸翔斗 同課美術博物館建設準備室長　馬場俊行 教育委員会事務局生涯学習課長　川口素生 同局文化財課　西口温子
欠席者	【委員】 中村晶宣委員
傍聴者数	1人

・・

1　開会あいさつ

小林委員長

2　第2回までの共通認識及び第3回の協議事項の確認

- 事務局より説明　資料1・資料2
- 委員から質問無し

（小林委員長）　次の事項に入る前に今後の流れを確認しておく。今回と次回で、2月に公表する中間答申として委員会の意見の取りまとめをしていく。今日も活況に議論をしてもらいたいが、前回までのように、思いついたら次々いろんな角度から発言するというよりは、それぞれの論点について、1つ1つ潰していくという形でご発言をいただきたい。

3　報告事項

(1) 伊賀市関係部署から取組内容の説明及び質疑応答

（小林委員長）　伊賀市の関係部署から現在の取組内容の説明をいただいた後、それに対す

る質疑応答を受け付ける。まずは、文化振興課から上野天神祭のダンジリ行事に関連して行政として行っていることを説明いただきたい。

（文化振興課）　文化振興課としては、上野天神祭のダンジリ行事の継承、展覧、普及等、郷土文化の振興及び伝承を図るため、上野文化美術保存会が行う活動に要する経費に対し、上野天神祭のダンジリ行事保存継承事業交付金を交付している。

行事の当日の運営にあたって、上野文化美術保存会からボランティアスタッフ確保の依頼を受け、市職員からだんじりの曳き手ボランティアを募り、当課で取りまとめをしている。

加えて上野天神祭地域振興実行委員会から依頼を受けて、当日の警備人員の確保についても市職員に募集をかけ、当課で取りまとめている。また、実行委員会のクラウドファンディングの周知にあたって、市広報での周知を行っている。

（小林委員長）　ありがとうございます。続いて、生涯学習課から上野天神祭のダンジリ行事に関連して行っていることを説明いただきたい。

（生涯学習課）　生涯学習課では、生涯学習事業として子供と保護者を対象に体験教室を年 4 回行っている。組紐づくり、上野天神祭の学びのウォーク、陶芸教室、お囃子体験の 4 の事業である。本事業の目的は、伊賀の伝統ある祭りや伝統工芸などを子供らに体験を通じて認知し身近に感じてもらうこと、保護者と子供の繋がりを深めること、後世の担い手としてこれからの子供らを育成していくことである。今回関係するのが上野天神祭学びのウォークとお囃子体験。実際に今年の実施の様子も含めて説明する。

上野天神祭学びのウォークは主にハイトピアで開催している。はじめにハイトピアで文化財課からだんじり行事と鬼行列について説明を受け、その後、町に出てその町のだんじりについて詳しく説明を受け、乗車体験を行う。さらに鬼行列の説明を受けて、鬼の面を付けて出陣式の見学をするという内容である。今回は 8 組 19 名の参加があった。特に小学校 2 年生の子供は 2 回目の参加で、非常にだんじりに興味があり自ら勉強し、よく知っていて、だんじりの幕を見ただけでどの町か見分けられている様子だった。子供らはずっと興味をもって話を聞いてくれていた。

また、お囃子体験は毎年 2 月に開催している。もっと祭りに近い時期に開催したいが、各町が練習の最中で教室を開いてもらえないので、毎年 2 月に開催している。今年度は 2 月 23 日に開催予定。昨年は、12 組 25 名の参加があった。開催場所は西部地区市民センター。このお囃子体験は、町のお囃子について説明を受け、その後に鉦の打ち方を練習するという流れになっている。参加した子供らから、お祭りでだんじりに乗ってお囃子の演奏をしたい、来年もう一度参加したいという感想が寄せられた。

（小林委員長）　続いて文化財課から上野天神祭のダンジリ行事に関連して、行政として

行っていることをお願いしたい。

（文化財課）　文化財課では、無形民俗文化財である上野天神祭のダンジリ行事が安心、安全に当日の運行ができるように、夏頃から調査などに同行し、昔の文献に則って行事が進められ、継承されているかを確認している。

また、市から補助金は2種類があり、一つは、だんじり本体や車輪、幕、飾り金具といった金額が嵩む修理に対し、国・県の補助金と合わせた市の随伴補助金の支出。もう一つは、市の単費により、だんじり町9町、鬼町4町の計13町に対して上限250万円の中小の修理費を負担している。

現在取り組んでいる大規模修理は、令和元年度から進めている福居町の 4 枚の幕（前左右後ろの幕）である。1枚の幕を3年かけて、あわせて6年間をかけて復元新調、復元修理を実施しており、こちらは実は1年でできるものだが、大変金額が嵩むものなので6年間で進めている。

これからまだまだ復元新調や復元修理を待っている町もあるので、これまで通り継続して進めていきたいと考えている。

（小林委員長）　それでは続けて美術博物館建設準備室から説明をお願いしたい。

（美術博物館建設準備室）　美術博物館建設準備室では上野公園にある芭蕉記念館が築60年以上経ち、かなり老朽化が進んでいるということで、それの建て替えとあわせて博物館美術館機能を加えた施設の整備を行っている。芭蕉の直筆資料や文化財などを適切に保存・保管できる環境を整えながら、歴史文化の振興の拠点となる施設になるよう、現在、基本計画の検討を進めている。

ただし、11月に市長が変わり、12月の議会で新市長から、この施設は芭蕉翁記念館を中心とした施設にする、コンパクトな施設にする、桃青中学校跡地ありきでないようにしたいという発言もあるので、今、市長の意向を確認しているところである。この委員会の資料の中では、美術博物館と併せて検討すると書かれていたが、状況は変化しているので、ご期待にこたえられるかどうか不透明な状況となっている。

（小林委員長）　以上4課からご説明をいただいた。委員の皆さんからご質問などあればいただきたい。

（福田副委員長）　生涯学習課から色々な体験教室があるという話があった。いつも参加されてる方の地域、例えば、市内なのか市外なのか、その辺の統計がもしあれば教えてもらいたい。

（生涯学習課）　参加者は全員が市内である。祭りに関係する町の子以外から参加者はいるが、人数は調べていない。

（福田副委員長）　承知した。

（後藤委員）　今、市内の学校を含め、特に中学校で探求の時間という、地域の文化や歴史などを学ぶというものがあると思うが、市内の学校で普段の学習の中で、だん

じりについて学ぶ機会はあるのか。

（生涯学習課）　市内の小中学校の取組は学校教育課の範囲かと思うので、当課では分かりかねる。

（後藤委員）　承知した。例えば地域の公民館など、だんじり会館以外のところで、若者もしくは子供たちが触れるような機会は、何かあるのか。

（生涯学習課）　生涯学習課のあるハイトピアが公民館になっており、ハイトピアでこれからの子供らに向けて、こういった体験事業として実施している。

（後藤委員）　分かった。

（小林委員長）　先ほど、学びのウォークはハイトピアで、お囃子体験は西部地区市民センターで実施しているという説明であった。

私からお尋ねする。お囃子体験に参加された子供が結構いるようだが、その子たちが実際にだんじりに乗ったり、だんじりのお手伝いに入ってきたりして繋がっているケースはあるのか。

（生涯学習課）　確認したが、誰が乗ったのかまで把握できていない。ただし、参加した子供らは乗りたいとか、また来年も体験したいと言っていたと聞いている。

（小林委員長）　全市としてダンジリ行事を支えていこういうことならば、そういったきっかけを通じて、子供たちが、だんじりに参加できるようになり、まさに特定の地域のものだけでなく、今後皆が参加できるようになると良いと考える。

他に委員の皆さんからご質問はどうか。

（委員）　意見無し

(2) 他自治体の山・鉾・屋台行事関連施設の調査結果

（小林委員長）　次に報告事項の 2 番目に進めていく。前回の委員会で、他の施設はどんな課題があるか、或いは、課題にどう対応しているかなどを調査して欲しいという意見があった。これを受けて事務局にて、山鉾屋台行事がある自治体対象に調査をしてもらったので、その報告をいただく。

➢　事務局より説明　資料 3

（事務局）　今回 26 の自治体にアンケートの調査を協力依頼し、そのうち 21 の自治体から 25 の施設について回答があった。

高山祭屋台会館は民間の設置ということであるが、それ以外はすべて行政、各自治体が設置している施設である。

施設の内容は、祭り・行事単体を展示観覧できる施設もあれば、博物館や郷土資料館、道の駅などの複合施設の一角に関連する展示コーナーが設置されているなど、施設規模も、延べ床面積が最少では 200 平米、最大では 2500 平米を超えるような施設もあり、それぞれの自治体によって千差万別であったという印象を受けた。

施設の運営者は、指定管理者が 12、直営が 13。直営についても、業務委託で運営しているところが 13 のうちの 7、職員が直接運営しているところが 6、その他で 1 であった。

各施設が抱えている問題点や課題は、展示物や収蔵品の保存管理に関すること、施設の運営管理に関することの 2 項目に絞って調査を行った。

1 点目の展示物や収蔵品の保存管理については、10 の施設が空調、温湿度管理の不具合、設備の不具合、設備機能自体の不足について回答があった。収納スペースの不足については 4 つ、照明設備の不具合、機能不足による適正管理について、展示物の防犯上の問題について各 3 ずつ回答があった。

2 点目の施設の運営管理についての問題点は、8 の施設が突出して、建物や設備の老朽化や劣化により起こる様々な問題を挙げていた。

分析 1 と 2 で問題があると回答した施設の共通点は、開館年が昭和 50 年代後半から平成 10 年ぐらいまでの施設が多く、平成元年に開館した、だんじり会館の前後にあたる開館年にあたり、どの施設も老朽化によって生じる問題が多く発生しているという印象を受けた。

また、2 点目の施設の運営管理に関する問題点は、施設の老朽化以外にも、だんじり会館の課題でもある入館者数の減少や収益の確保について課題があると回答しているところが 3 施設あった。次いで、職員、学芸員も含めて人員の不足、委託先の人員不足や高齢化による課題、施設の維持管理費への負担感、施設のバリアフリー化や建物の構造上の問題、安全防犯上の問題、施設の管理者や経営上の問題や課題を持っているという結果が得られた。

（小林委員長）事務局の説明について、委員から質問はあるか。

（後藤委員）　調査をした会館や文化施設に関して、条例であり方を規定されている施設は大体どのぐらいあるのか教えてもらいたい。

（事務局）　今回の調査では条例の設置状況まで聞き取りは行っていない。おそらく、市が所管し指定管理者が運営している施設や直営の施設は、設置条例を定め、行政財産として運営しているところが殆どであると思う。

（後藤委員）　承知した。

4　協議事項

(1) ダンジリ行事及びだんじり会館のあるべき姿（方向性）

（小林委員長）　各課からの報告内容や、他の自治体の山鉾屋台行事関連施設の状況なども踏まえ、事項の 4 番目、協議事項に入っていく。冒頭に申し上げたように、意見の取りまとめに入るので、限られた時間の中で、各項目の論点に絞ってご発言いただきたい。

テーマ 1　「文化」か「観光」か

（小林委員長）　こちらの共通認識はある程度まとまってきている。「文化観光は地域の人、歴史、熱量の維持があった上で成立する。」それから、「元来、だんじり行事はまつり町の人々をはじめとした祭りに直接参画する人々が第一に恩恵を受けるものである。」という内容である。この部分について意見を付け加えたほうがいい、或いは、見解が違うといったことがあればいただきたい。

（福田副委員長）　この委員会以降、祭り町の人から色々な話を聞いてる感覚と、今回の取りまとめ内容とで、少しギャップを感じる。

祭り町の人が恩恵を受けて欲しいという思いは当然だが、その一方で祭りを維持していく中で、各祭り町が負っている負担感は否めない。秋祭で各町は 120 人ぐらいなければ祭りが運営できないという話を聞き、改めてそんなにも沢山の人員が必要なのかと感じた。一方、各町は高齢者が多い中、10 軒ほどで行っている町もあり、外から様々な伝手を頼ったりし、先ほど市職員にボランティアを依頼する話もあったが、そういう苦労をしてる部分もあるので、恩恵だけでなく、何か加えた方がいいと感じた。

また、あるべき姿として、この上野天神祭は山鉾屋台行事として京都の祇園祭に起源がある。例えば、獅子舞であれば豊作を祈願するものであるが、山鉾屋台行事はやはり多くの人に見ていただくのも機能の一つで、祭り町の人だけでなく、伊賀市に住んでる人や観光客も含め多くの人にとって大変魅力的なものである。この部分の書きぶりについて、若干違和感がある。

（小林委員長）　恩恵という表現が相応しくないかもしれない。第 2 回の意見に、やはり一番いいところは祭り町の人々が楽しみ、その楽しんでいる姿があるからこそ、それを観光客にもお裾分けできる。また、祭り町の人々がしっかりと継承し、或いは、祭りに参加される方々が祭りを堪能していただくことが前提だという話があった。この部分は表現を改めたほうが良いという意見である。

（福田副委員長）　この山鉾屋台行事は、元来、文化でもあり観光でもあるという性格を持っているので、その辺りを踏まえて、表現を事務局で再検討いただきたい。

（小林委員長）　具体的な文言は、次回に最終的な整理をしていきたい。福田委員から意見のあった、元々多くの人に見せる行事であり、その行事をしっかり地域の人たちが受け継いで、自分たちのものとして楽しんでいただくことを通じて、それが外の人たちにも見せられるし、観光客にも喜んでもらえるものになっていくことで、文化と観光が両立していくという趣旨を付け加えてもらいたい。

テーマ 2　無形民俗文化財（行事）としての維持・継承（行事：3 日間）

（小林委員長）　この行事が行われる 3 日間についての無形民俗文化財の維持継承について、ご意見をいただきたい。第 2 回目の議論によってだんじり全体のあるべき姿、目指す取り組みの方向性として、「祭り町の人達との一定の信頼関係のもと

ダンジリ行事の魅力に共感し、継続的な関わりを持っているファンやサポーターを増やす」という内容が導き出されている。これに追加でご意見お持ちの方、或いは見解と違うという方があれば発言をお願いしたい。

まず私から意見を述べる。「祭り町の人達と一定の信頼関係のもと」とは、祭り町の人たちと誰との間のことか。この文章だとそれが読み取りにくい。

（事務局）　後に続く文章にある、祭り町周辺の人や、地域郡部の子供も含めてのファンやサポーターを示している。

（小林委員長）　「ダンジリ行事の魅力に共感し継続的な関りを持っている人たち」ということで承知した。

（後藤委員）　無形民俗文化財の維持継続に関しては今お話にあった通り、主と従の考え方があり、地域住民が主で、各ステークホルダーによる取組や支援は従にあたる。その上で、一つの町が祭りとしてきちんと成立させるためにどれくらいの人員が必要なのか。

（小林委員長）　先ほど各町 120 人程度という話があったが、福田委員から補足をお願いしたい。

（福田副委員長）　本来なら中村委員からお話しいただくべき内容だが。

私が、ある町の人に聞いたところ 120 人という話だった。町によって曳くものが違うので、1 町あたり 100 人以上が必要なのだと思う。今は小さい町は 10 軒、大きな町でもそんなに多くはないので、自分たちの町の人数より相当多くの人員が必要である。しかも、だんじり会館が出来た当時に比べると各町の高齢化は進んでいる状況からも、その程度の数は想定できる。

（後藤委員）　今のお話を踏まえて、実際に地域の住民の中で持続していくために、現実的にどのような打ち手があるのか考えておかなければいけない。例えば、現在は約 70%が県内大学の留学生や地元の信用金庫からの協力者であるが、仮に、その協力者が減少してしまった場合、他に取り得る選択肢があるのかも含めて、今回検証しておくべきと考える。

（福田副委員長）　これも本来、中村委員からご発言いただけると良いが。

例えば、祭りに関わる人は、だんじりの曳き手、お囃子の演奏者、その活動を支える人など、色々な役割の人がいる。中でもだんじりの曳き手は一番人数が多く、40 人ほど必要である。先ほど曳き手のサポーターを募集している話もあったが、曳き手は力が要るけれども、経験はさほど要らない。一方で、お囃子は 1 日の体験で出来るものではない。囃子は 1 曲ではなく 4~5 曲あり、角を曲がるときは特別な囃子を使うなどすべて決まっているので、祭りの前 10 日間から 2 週間はお囃子の練習をしなければいけない。

さらに、小学校の子供はまず鉦から始めて、その次に太鼓、大人になって笛という形で、長い年月を経ながら覚え、継承していくもので、かなり時間がかかる。

だんじりは車のようにタイヤが曲がらないので梃子で返す必要があることから、だんじりのことを分かっている人しか出来ないからこそ、年齢が高くても経験があれば多少はできる。祭りは持ち場によって機能が違うが、一番根幹になるのはお囃子である。町によって状況は違うが、自分たちの町に子供がいなくなっても、苦労をしながらも、知り合いの中で支える子供がいて、遠いところだと大阪や京都から通ってくる人もいて、なんとか維持している。

だんじりの曳き手は、市職員や企業からボランティアがあるので、何とかなるという感触を持っている。

（後藤委員）　今話を伺って一つ事例を思い出した。10 月に行われる岐阜県の高山祭で、弊社の元社員が高山にＵターンで戻り、囃子を担当することになった。やはり山車を曳くより、お囃子のほうが技術が要るということで、地元の商工会との打合せなどは 2 週間前から全部止めるなど、町ぐるみで文化として残そうという機運があり、且つ、地元に U ターンで戻った人が祭りに関わることで仕事を通じてメリットがあるという仕組みが作られている事例もある。新しい人が祭りに参画するために生活と経済のまとまりの中から人を確保していく方策があると良いと考える。

（小林委員長）　町全体で支えていける雰囲気づくりが必要という意見であった。

私から意見として述べる。共通認識の部分に「担い手の確保はそれぞれの町が工夫し形を変えながら取り組むべき。」とあるが、それぞれ町が工夫をして確保できていればよいが、いよいよ確保できなくなってからでは手遅れである。そうならないうちに、手を打っていける支援やサポートも必要ではないか。

一方で、市（行政）も交付金や補助金を入れて、市全体のものとして祭りを維持していこうとしているが、自分も参加したいと思う市民が祭りに参加できないのは、実は具合が悪いと思う。市の職員であればボランティアで参加できるが、意欲のある一般の市民も参加できるようなマッチングが必要ではないか。

例えば、生涯学習課でやっている体験教室を通じて、お囃子が面白い、自分も囃子手になりたいという子供が出てきた時に、祭り町へ紹介し引き受けてもらえるような取組があっても良いと思う。

市が祭りの運営費を交付金として支出し、維持している祭りなのに、参画したい市民が参加できないのは違和感があると感じる。各町だけが工夫をしてやっていけば良いというものではなく、やりたい市民が参加できる仕組みも必要だと感じる。

（重藤委員）　私の地域は郡部で獅子舞しかないが、やはり子供たちが参加して、体験しながら 1 カ月間毎日毎晩行われている。となれば、同じ市内でも毎日、家から上野まで来るのに 30 分かかるので、可能不可能があるかもしれない。

従って、今は現地に行かなくても通信で見られるので、それをうまく活用しな

がら、1 週間のうち一度だけ行けば、残りは動画で教えてもらえるようにすることで、更に広がりが出るのではないかと思う。

（小林委員長）　どのようなやり方にするか、考慮をしなければいけない。

（重藤委員）　その通りである。子供達は、中学生、高校大学になると離れてしまうことが多い。伊賀市に戻ってくる子供も少ないかもしれない。しかし、小さい頃からお囃子を聞いていれば、祭りの時期になるとワクワクしてくる子は絶対いるはずだから、そういったことに小さい頃から馴染めるようにすると良いと思う。

　また、生涯学習課のお囃子体験がどれくらい周知され、皆さんが認知していたかも気になる。自分の子供が小さい頃にこの体験教室があったかどうか分からないが、あったとすれば、体験教室自体を知らなかったと思う。

（小林委員長）　やり方に問題があるにしても、方向性としてどうだろうか。

（山口委員）　参加しやすいマッチングが必要という考えに同意する。生涯学習課では体験教室を通じファンやサポーターを増やす取組が実施され、参加者は本当に地域に興味があり参加しているので、19 名の参加者をいかに大切に祭りの担い手として育成し、つなげていけるかにかかっているという意味で、とても大切な役目と担っていると思う。

（小林委員長）　ダンジリ行事全体のあるべき姿や目指す方向性としては、今申し上げた、やりたいと思う市民の方がいれば、できるだけ受け入れていける方法も含め、維持継承していく方向を加えていくこととする。

テーマ 2　無形民俗文化財（行事）としての維持・継承（行事以外：362 日間）

（小林委員長）　次に、祭りの日以外の 362 日間の維持継承という部分に移る。祭りの時期、或いは祭りの直前、準備期間だけでなく、日頃から市民全体或いは関係人口がこの無形民俗文化財に触れることで、その魅力をより深く理解できるような場が必要であるとまとめられている。この部分について、委員の皆さんから意見があれば伺いたい。

（福田副委員長）　だんじり会館の来館者が減っているという話がある一方で、本会議でも子供たちへの啓発っていう話が出てきてる。今、市内の小学校の子供たちがだんじり会館に社会見学などで訪れるケースはあるのか。

（生涯学習課）　大体 3 年生が住みよいまちづくりの学習でハイトピアに訪れ、その後で、だんじり会館や伊賀上野城に行っているケースがある。正確に行先までは覚えていないが、5、6 校は間違いなく言っている。数はもっと多いかもしれない。

（文化財課）　各小学校から文化美術保存会に依頼をして、だんじり会館や当該学校に派遣をしてもらい、行事の伝承・継承について説明を聞いたり、鬼町やだんじり町から何人か出てもらい文化財の活用方法について検討いただく取り組みを実施している。

（小林委員長）　先ほど後藤委員からも学校の探求学習ではどんな取り組みがあるかという質問も出されていた。ある程度、学校ごとにだんじり会館に行ったり、或いは小学校に人を派遣して説明をするなどで、子供達がダンジリ行事について学ぶ機会を持っている学校もあることが分かってきた。

次回までに事務局から学校教育課に取組内容を聞き取りをして、旧上野の小学校だけなのか、郡部の小学校も学習機会があるかも含め、調査をしていただきたい。

では、ある程度は学校を通じて子供たちが知る機会もあることを前提とした上で、あるべき姿や目指す方向性について、ご意見はどうか。

（福田副委員長）　今も子どもの話が出たが、あるべき姿、目指す方向性には「子どもたちをはじめ」ということを文言として例示で入れると、もう少し明確になるかもしれない。

（小林委員長）　ではご意見の通り、「日頃から学校教育の現場をはじめ市民全体が」というようにつなげてもらいたい。

テーマ３　有形文化財としての保全・保護（「幕」について）

（小林委員長）　祭りの期間以外にも日頃からどう関係を持っていくか、触れていくかになると、展示物をどうするかという有形文化財の話にも関係してくる。一つ目の論点である「来訪者にとって魅力ある展示や企画は誰によって行われるべきか（誰が担えるのか）。」について、ご意見をいただきたい。

（山口委員）　祭りのことはやはり、祭り町の方々が歴史も含め、非常によく知っている。だから本来、祭り町の方々に担ってもらいたい。祭り町の方が伝えてくれると、こちらもワクワクする。実際にやっている人の生の声や、祭り町の人々しか知らないことも聞いてみたい。

（小林委員長）　先ずは祭り町の方々に担っていただきたい、生の声が聴けると嬉しいという意見であった。

私から意見を述べる。これまでの議論の中で、元々上野の町自体が計画的に作られた町だとか、或いはだんじりは祭り町の人たちだけでなく、外の人たちにも見てもらうための祭りとして成立してる部分があるとか、そういった内容は、やはり学芸員が居てこそ初めて価値、背景、歴史的な成り立ちについてきちんと伝えられるのだと思う。今はだんじり会館に学芸員はいない状況の中で、ではどうやってそれを伝えていけるかが一つ課題になると思う。

そこで美術博物館建設準備室に尋ねる。当然、博物館や美術館に学芸員を置かれると思うが、やはりそこに想定されてるのは芭蕉関係の文学の専門の学芸員なのか。だんじりのことも守備領域としていただくのは難しいのか。

（美術博物館建設準備室）　現在、芭蕉翁記念館には国文学の分野で 2 名の学芸員がい

る。従来通りであれば美術館と博物館の機能に応じた学芸員を置こうとしていた。美術館は絵画、博物分野は歴史や考古で、民俗などの色々な分野がある。しかし、先ほど言った通り新市長の意向で今後の状況は分からないので、なかなか発言をしづらい。

（小林委員長）　先が読めないようだが、この会議として、だんじり会館に拘らなくとも、ダンジリ行事をしっかりと継承し伝えるためには、美術工芸品とも言えるだんじりの有形文化財の価値やその歴史的な背景を理解し、説明ができる学芸員を伊賀市として配置し、その学芸員が監修していくことが望ましいということを述べておきたいが、委員の皆さんはいかがか。

（委員）　全員から同意

（小林委員長）　それでは、誰が担うかという論点については、当然第一義的には祭り町の方々にしっかりと自覚を持って担っていって欲しいということと、もう一つは、きちんと説明ができる学芸員が必要であるという、二つの意見として取りまとめていく。

テーマ３　有形文化財としての保全・保護（だんじり本体について）

（小林委員長）　次に、修理センター（ドック）の必要性についてご意見を伺う。先ずは、文化財課から、現状としてだんじりの修理に関する方針を説明いただきたい。

（文化財課）　だんじり本体や幕の修理を行うにあたり、先ずは各町から文化財課に対して要望が出される。それらの要望を取りまとめ、各専門分野の有識者が入った審議会による調査で修理の必要性や緊急度が判断され、それを経て、修理を行う順位が決められていく。その順位に沿って祭り町の 13 町の代表が出席する会議において毎年度承認を得たものを事業化されていくものである。あくまでも事業主体は上野文化美術保存会であり、要望を受けたものが対象になるので、市が主導しているものではない。

（小林委員長）　今の説明を受けて、委員の皆さんから意見を伺いたい。

（福田副委員長）　私は今文化財課から説明のあった修理検討委員会の委員を務めている。

委員会の第 1 回の発言要旨について振り返ると、だんじり会館のよう特徴的な施設があるかという話の流れで、修理に熱心に取り組んでいる印象のある長浜市の事例が紹介され、色々な議論や説明があった。今回のアンケート調査を見ても、長浜は他の施設と違いはあるものの色々な課題があると感じた。

委員会の議論の流れから修理ドックの話が出ているが、私自身はこれに拘ることは無いと考えている。先ずは、文化財課から説明があったように、上野文化美術保存会の中での優先順位も当然あるし、町の人々の思いもあるので、本当に必要なことをやっていくとことが大事であることから。この部分のスキームは違和感がある。

（小林委員長）　長浜も調べると問題も多そうで、同じやり方をするのは難しそうという意見である。現状では修理センター（ドック）は無く、日頃は各町で山車を持っていて、順番が来たときに修理に出しているということである。

（福田副委員長）　だんじりは本体が木材で出来ており、それを幕（きれ）で飾っている。きれは取り外しができるので、京都の専門業者の工房に持って行き、修理をしている。一方で、だんじり本体は持っていくことはできない。主に負荷がかかってるのは車輪の部分で、だんじり会館の中での温湿度管理の問題がある。アンケートでも他の施設でも温湿度管理が難しいという結果が出ている。幕と木材の温湿度管理は違うので、それを一定の広い空間の中でやってこうとするのは、どうしても無理が出てくる。今の状況から、木部は車両中心に温湿度管理を適正に行い、幕は喫緊の問題もあるので専門業者に修理をしてもらうのが良いと考える。

（小林委員長）　あえて機能としてだんじり会館でそれを担う必要性は、必ずしも無さそうだという意見か。

（福田副委員長）　その通りである。

テーマ３　有形文化財としての保全・保護（保全コスト）

（小林委員長）　次の項目「目指すべき姿の実現に向け、費用対効果にすぐれた方策は」にいきたい。この問題は難しいと思う。他所の自治体のケースを見ても、資金不足に悩んでいる印象もあるが、この点に関してご意見を伺いたい。

（福田副委員長）　今回のアンケート調査で、今までおぼろげに考えていたことが非常にはっきりした。建設の年度はだんじり会館と同じ頃にできたところが多く、同じような悩みを持っていて、だんじり会館が今までと同じあり方で良いかを見直す時期に来ていることが明確である。

　その方策として、ソフトの方は一定色々な議論が出てきたが、ハードについてはお金が要る話で、色々な状況もあるので、それを踏まえて費用対効果を検討して必要がある。

（重藤委員）　だんじり会館の入館料はいくらか。

（事務局）　大人は 600 円、子どもは 400 円である。団体は 500 円と 300 円。

（菊野委員）　昨年の入場者は？

（事務局）　令和 5 年度で 5359 人。これは団体か個人かの検証はしていない。

（菊野委員）　学芸員を一人雇うといくらかかるか。今、芭蕉翁記念館はいくらか。

（文化振興課）　普通の職員一人分の人件費は必要である。

（小林委員長）　入館料で人件費の採算が取れるかという観点では、多分、昨年の人数では到底無理であるし、コロナ前の 2 万 2716 人でも難しい。従って、他の施設と共有化して学芸員を配置するなど、色々な方策を考えなければいけない。今まで議論している機能（ソフト）の部分は、必ずしも今のだんじり会館の場所でなく

てもできるような話もある。そうすると、館としてやっていくのかどうかも含めて、もう少し費用対効果を鑑みていく必要があることは、重要な論点である。

（後藤委員）　二点のことを述べたい。一点目は、ハード面として残すことありきではなく、最適な形を考えていくのが一番良いということ。

以前にも紹介したが、常滑市の陶の森資料館は、陶器・焼き物の町としてのランドマーク的な立ち位置となっていて、街歩きを促進するための入口のスポットとして機能してる。陶の森資料館自体は、陶器や焼物の購入をメインとする施設ではなく、あくまで、ランドマーク的なもので、常滑焼の文化について触れていただくための施設である。だからこそ、同じように今のだんじり会館に集まっている機能について、ハードでなければできないこと、或いは分散して他の場所でもできることを整理していくほうが良いと考える。

二点目は、アンケート調査で気になったこととして、岸和田だんじり会館の2023 年来訪者数は、コロナ前より増え 110%以上に伸びている。何か特別なことをやったことが要因になっているのか。例えば、地域の学生などと連携をした取り組みなど参考になるものがあれば、聞いてみたいと思った。

（小林委員長）　調査をした範囲で、事務局から補足をお願いしたい。富山県の城端曳山会館も増えているようだが。

（事務局）　岸和田だんじり会館は 2023 年度に開館周年記念として展示物のリニューアルを実施したと伺っている。施設管理運営は、指定管理者が企画提案事業や自主事業を活発に行い、誘客促進を図っているという回答をもらった。

（小林委員長）　城端曳山会館は、資料を見ると「市民が自分の地域の暮らしへの誇りや愛着の醸成を図ることが課題である。」という認識を持っているようで、先ほども出てきた「子供たちへのふるさと学習の機会提供や、ふるさとの歴史に触れる機会を増やし、曳山の魅力を伝えていく。」とある。入館者数を増やす工夫も大事ということと、更には、だんじり会館単体で考えるのではなく、地域全体の中で機能（ソフト）をどのように維持し、強化していくかも検討しなければいけない。

だんじり会館単体で検討しても費用対効果の観点から採算が取れない。先ほど福田委員から、だんじりのきれや本体の木組みを保管するため、温度湿度の管理が難しいと説明があったように、今のような広い所に展示をしないほうが、適正に管理できるかもしれない。きれは美術工芸品として、美術博物館で展示・保管をすることが有益と考えられる。

テーマ 5　文化振興によるまちづくりの全体像

（小林委員長）　このテーマの前回までの議論であるべき姿、目指す方向性は、「市全体の文化振興の観点（次世代への継承、魅力ある展示（学芸員の確保）、運営コス

ト、発信力の話など）からすると、今後の文化関連施設の整備検討は可能な限り一体的かつ有機的に行うべき」という、先ほど私が申しあげたことと重複することが見えてきた。

この部分のあるべき姿として過不足は無いか。

（委員）　発言無し。

（小林委員長）　我々の意見として、伊賀市として市全体の文化振興の観点から、これからどのような戦略を持って取り組んでいくか。その中でだんじり会館が担うべき機能をしっかりと位置付けていくことが大切であるという取りまとめにしたい。

テーマ４　施設の運営（維持管理）/地理的な視点からのあるべき姿

（小林委員長）　順番が逆転するが、テーマ４は前回までの議論で導き出された共通認識として、二通りのことが書かれている。一つは、周辺環境の変化や将来像を見据えつつ、地域と市外来訪者の両方にとってどのような機能を備えた施設がよいかを長期的な視点で総合的に考えていくこと。もう一つは、一定の収益性も期待しつつ、来訪者に対し伊賀上野の趣深く多様な歴史伝統文化へといざなうゲートウェイ的な機能があると良いかを考えていくこと。

テーマ ４ の論点については、現在のだんじり会館の場所建物におけるあるべき姿は、「特定の具体的な機能」なのか、それとも「周辺環境などによる変化を前提とするのか」と、委員の皆さんに投げかけがされている。これについて意見をいただきたい。

（後藤委員）　まさに先ほどまでの話に繋がる部分も多々ある。周辺の人口や設備、建物自体の老朽化という変化が生じてくる状況を踏まえ、周辺環境などによる変化を前提とすることを一定考慮する必要がある。だからこそ、あの場所に有ったほうが良いものが地域の住民から声が上がっているのか、或いは、これから先に何か声が上がりそうなのか、他の委員の意見をお聞きしたい。

（小林委員長）　敢えてあの場所でということか。

（後藤委員）　その通りである。

（菊野委員）　あの場所は、上野公園に訪れたあと次に行ってもらいたい所であり、来街者にまちへの回遊を促すためのポイントとして有効な場所である。正面にも町並みが見え目指すところが分かり易く、あの場所は非常に大事な所である。周辺には現在は組紐会館があり、商業施設も出来てきている。

だんじり会館については、今あるものを有効利用するのは当然のことと思うが、ただし、今の機能だけでなく、色々なプラスの機能を足していくことで効果が出てくると考える。

（後藤委員）　あるものを活かすというのは当然の意見である。何より私がこれまで色々

な地域を見る中で、地域への愛着は非常に重要な観点であると感じている。子供の頃からあるからこそ文化の拠り所になるし、そういったものは絶対に活かしていくべきで、その愛着は唯一無二である。

ただし、機能として何が必要かいう議論とは切り分けて考えていくと良い。それぞれが最適な場所に、適切に配置されている状態が理想であると思う。

（山口委員）　駅前の商店街にいると、観光客から、駅前に普段からダンジリ関係の何かがあれば年 1 回祭りがあることがもっと分かり易いといった声や、町の人からも線路の向こうより駅前にあったほうが皆にダンジリに触れてもらう機会が多くなるという声も届く。

（小林委員長）　もう少し町の入口に近いところにだんじりに触られるものがあるほうが望ましいという声があるという意見である。

（後藤委員）　だんじり会館の場所が今あそこにあることを切り離して話を聞いて、私が思ったことは、だんじりという文化を認知し、だんじり文化にもっと触れ易くする方法として、有形や無形といった手段が他にもあるかどうかを、もう少し検討していくことも必要だということである。先ほども学芸員や生涯学習など、幾つか無形の選択肢が出てきたが、あそこのだんじり会館の他に何か無形の方法があるかどうか整理をしたいと思った。

（小林委員長）　立地としてあの場所は、公園から出てきて街の入口にあたるので、非常に良い場所であり、町を回遊していただくための拠点としてあの場所が生きてくるという視点は大事であるという意見と、一方で、駅で降り商店街に向かおうとする人達にだんじり文化を感じ取ってもらう方法は、機能として必要であるが、必ずしも今の場所でなくてもできるかもしれないという意見であった。他にご意見はどうか。

（菊野委員）　街中でだんじり文化を感じ取るのに一番手っ取り早い方法は、だんじり蔵を有効活用することである。でもそれらは駅前には無い。具体的にどのような方法があるか、他の委員から意見を伺いたい。

（後藤委員）　私は商店街にまだ行っていないので、抽象的な話になるが。機能として文化となるストーリーが明言化されていることは非常に大事だと思う。だんじりの文化が認知されるためには、歴史が書いてあるだけでなく、例えば、だんじり文化を語る語り部がいて、その語り部のいる場所を案内するなどのアクセス方法があると良い。リアルではなくデジタルを活用した方法でも、全然問題は無いと思う。街中に QR コードを置く方法も考えられる。デジタルとアナログを上手く組み合わせた仕組みも検討していくことも一つ考えられる。

（福田副委員長）　上野城下町は戦争で焼けず、江戸時代の町割りがそのまま残っている。今ハイトピアのある辺りは東大手門があった所で、線路やだんじり会館のある場所は城内があった。だんじりを持っている東町周辺は町場が広がっていた。私

は歴史を専門にしているので、今の位置関係と江戸時代の町割りを思い浮かべながら町を歩いており、一般の人にもそのような情報がうまく案内できれば、上野の町歩きを楽しんでもらえる。様々な観光マップが作られているが、案内するのは難しいようである。デジタルも活用すれば、色々な工夫ができると思う。

（小林委員長）　ポイントとなる場所に QR コードが貼ってあり、スマホをかざすと説明が音声で流れ映像で見られると、町の特徴が理解してもらい易いだろう。

（山口委員）　今、だんじり蔵の前に、実は QR コードが貼られていて、各町の YouTube が見られるようになっている。

（小林委員長）　それが知られていないようだ。

（菊野委員）　来街者に対して蔵までのアクセス方法が示されていないことは、解決しなければいけない課題である。

（小林委員長）　駅前での案内が不足している。

（重藤委員）　伊勢神宮は無料のボランティアガイドが案内をしてくれて、それが面白いという評判を聞く。伊勢はお社の前に QR コードがあり、読み込むと長文で難しい内容の文章が表示され、読んでも面白くないらしい。

　だから、文字を読むより、祭り町の方のボランティアガイドのほうが面白く体感できるのではないかと思う。

（山口委員）　例えば、各商店街に年に一度祭りが行われることが分かる看板を付けることが大事だと、遠くから訪れた人から言われる。

（小林委員長）　来街者に、上野はだんじりがある町だということを、もっと感じ取っていただくような工夫も想定できるのではないかという意見が出た。一方で、だんじり会館の場所は、公園から町への回遊に繋げていける場所に有るので、その場所として有効利用していくべきという意見もあった。他に付け加えておきたい意見などはあるか。

（委員）　発言無し

（小林委員長）　すべての項目について議論が済んだので、これをもって会議は終了する。

5　その他

（委員）発言無し

（事務局）　本日の協議内容や確認の必要な事項を盛り込み、次回の資料をまとめていく。

　次回の委員会日程は、1 月 27 日（月）13 時 30 分から。

以上